

II 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容（作物別事項）

1 水稲

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p> <p>○緑肥作物利用技術 緑肥作物（レンゲ等）を栽培し、作付け前にすき込む。</p>	たい肥施用量 1t/10a
化学肥料低減技術	<p>○局所施肥技術 側条施肥、育苗箱施肥等により肥効率を向上させる。</p> <p>○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 ・コシヒカリ 3kg/10a 以内 ・ヒノヒカリ 5.2kg/10a 以内
化学農薬低減技術	<p>○温湯種子消毒技術 温湯浸漬処理（58～60℃）により種子伝染病害（いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、心枯線虫病）の発生を抑制する。</p> <p>○機械除草技術 除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○除草用動物利用技術 動物利用（アイガモ等）により雑草を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・トリコデルマ剤（いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、苗立枯病） など</p> <p>○マルチ栽培技術 田植え時に再生紙を敷詰め雑草の発生を抑制する。</p>	化学合成農薬成分回数 ・コシヒカリ ヒノヒカリ 8成分以内
<p>その他留意事項</p> <p>有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。</p> <p>緑肥作物（レンゲ等）の利用・レンゲは開花始めまで、また入水1ヶ月前までにすき込む。</p> <p>ケイ酸を含む資材を活用して病害虫に強い稲体づくりに努める。</p> <p>温湯種子消毒は、58～60℃温湯で15～10分浸漬する。温度及び時間管理により防除効果や発芽率が左右するので注意する。</p> <p>畦畔の機械除草では、出穂10日～1週間前に実施する。</p> <p>農薬の使用に関しては、農薬登録を遵守する。</p> <p>「あきたこまち」、「山田錦」の化学肥料、化学合成農薬の使用の目安は、西讃地区しおりを参考基準とする。</p> <p>〔あきたこまち：化学合成窒素量3.5kg/10a以内、化学合成農薬成分回数8成分以内〕 〔山田錦：化学合成窒素量2kg/10a以内、化学合成農薬成分回数8成分以内〕</p>		